

慶應BRBフォーラム

WHO'S WHO

日本でできる国際貢献 —— 医師の立場から

海外で病気になった時ほど心細いことはない。
どこの病院を訪ねればよいのかわからない、
言葉が通じない、
医療制度がわからない、
異国の地でこんな経験をした方は多いだろう。
現在、日本に滞在している外国人も
決して例外ではないはずだ。

小林国際クリニック院長
国際医療情報センター所長

小林 米幸 (49 歳)

誰がするのが、と思ったときに

小林氏が神奈川県大和市に開業したのは三年前。
「学生時代から海外で外科医として働きたいと

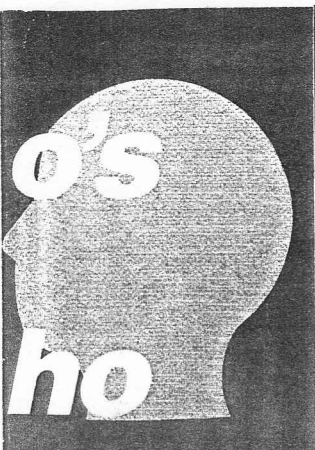
いう気持ちはあったんです
が、相手国や私の事情でな
かなか実現しませんでした。
そんな状態のまま昭和五十
七年、大学から神奈川県大

和市立病院への勤務を命じられ、インドシナ難民
大和定住促進センターに入所していた難民の医療
に携わることになったのです。日本に迎えられた
彼らの健康状態をチェックしたり、同センターか
ら社会に出た後、病気になったときの治療にもあ
たりました。それまで考えてもみなかった開業を
意識し始めたのは、それからのことです。

理由の一つは、海外に行かなくても、日本の中
に外国があるというくらい外国人が生活している
ことがわかったから。もう一つは、とりわけ日本

語が理解できるようになるのに時間がかかる高齢
者が、同センターから社会に出て病気になったと
き、どうやって病院を探し、病状をうったえれば
いいのかと思ったから。

さらに、日本のインドシナ難民事業では、定住
者の数が一人になると締切りますが、大和のセ
ンターの場合、収容者はすでに九千人近い数。定
員いっぱいになると、現在国内にある他のセンター
(大井国際救援センター、姫路定住促進センター、
大村一時収容所)も閉鎖されてしまうのではない





か。そうだったら、どこで誰が外国人に医療を提供しているのかと思っただけです。公立病院の中に、そういうセクションがつかれないか、ぜひぶん打診しました」

結局、日本に来て社会に出た彼らに医療サービスを提供するには自分でやるしかなかった。

体調を崩したため一年で閉業した医師から現在の施設を譲り受け、看護婦やスタッフのほとんどは、それまでいた病院から引き連れてきた。韓国・延世大学の医学部を卒業し、慶應大病院に入局した経歴を持つ妻は小児科医なので外国人の子供たちの病気を診ることができるとし、韓国語にも不自由しない。日本語ができるインドネシア人の事務員も雇い、カンボジア語、中国語、ベトナム語など八カ国語で診療が受けられるようにした。

「外国人の診療を前提に開業したことを日本人にも理解してもらったため、あえて医院の名前に国際を付け加えました。外国人患者を積極的に受け入れる数少ない医院というわけです。ただし、外国人専門の医院ではありません。この大和で開業している以上、地域の方々を診るのも大切な役目ですからね。」

開業した最初の一カ月に診療にやってきた外国人は延べ二十人。現在では一カ月に延べ二百人がやってくる。この数は、同クリニックの全体の患者数の約二割を占めている。

平成三年四月には、友人の医師六名とともに、在日外国人の医療相談を受けるAMDA(アジア医師連絡協議会)国際医療情報センターも開設した。今年五月には、さらに人員を増やし、体制を強化するため事務所を新宿に移転。現在、常勤する五名の有償ボランティアのほか、五十名の通訳者が日常の医療相談を中心に救急患者の電話通訳サービスなどにあたっている。こちらは開設以来八十九カ国の人々から二千七百件にもぼる相談を受けている。

設立当初は予想もしていなかったが、東京都の委託を受け、都が独自に管理する医療機関情報とドッキングし、紹介できる病院の数も増えている。対象となる在日外国人は、合法、不法滞在者の別にはこだわらない。

在日外国人に対する

原則論と現実論

小林氏は、今年初め、そのAMDA国際医療情報センターの仲間の協力を得て「医者と患者双方の手助けになれば…」と二冊の本を相次いで出版した。在日外国人向けに、健康保険、生活保護、生活保護法など日本の医療・福祉制度を、日本語、英語、中国語、韓国語、ポルトガル語、スペイン

語の五カ国語で分かりやすく解説した『日本の医療・福祉制度ガイド』(中山書店)。もう一冊は、医師に対して、宗教・風俗・習慣の違いから生じる診察時のトラブル、言葉の問題、高額医療費未払いなどを具体的にアドバイスする『外国人患者診察ガイドブック』(ミラリス)である。

「診療して困っている在日外国人から診療代をとらないのは一見美談ですが、好意だけでは限度があります。外国人の自助努力を促すことが先決できる範囲で無理なく行うことが長続きする秘訣です。また、日本では、現実論と原則論にギャップがあることも問題。特に、今問題となっている不法滞在外国人の問題については、現実を原則に合わせるか、原則を現実に合わせるか、どちらが必要なのではないでしょうか」

取材中、七月末にネパールやバンブラテシユ周辺を襲った大洪水で被災した人々のもとに二回目の医師団を派遣する旨のファクシミリが、小林氏が指揮するアジア医師連絡協議会から送られてきた。医師の手配も、また彼の仕事なのである。

診療室の隅には、フィリピンや中国、カンボジアなどのカセットテープがずらり。患者のためかという問いに、いや、私自身も好きだからと笑い。これから暫くは、平成6年9月に完成する大阪新空港で急増が予想される関西の在日外国人のために関西に開設するAMDA:センターの準備にも忙しい。